

奥多摩の自然



# 奥多摩

《第17号》

平成22年4月15日  
奥多摩観光協会



木版画  
安藤修二

## ～ 季節 だより ～

### 「奥多摩の花 百選」を募集します

このたび、奥多摩に咲く花を100種類、皆様から募集することになりました。

奥多摩に咲く花といたら、あなたはどんな花を思い浮かべますか。春のカタクリから夏の花・レンゲショウマや秋に咲くリュウノウギクなど、人それぞれに思いはいろいろでしょう。道端に咲く花を見て、「雑草」と言ってしまえば、それきりですが、おかしな名前のアブラチャンやヘクソカズラも、見方次第で美しい花にも、思い出の花にもなります。

これからの季節、花を求めて多くの方々が奥多摩を訪れます。スプリングエフェメラルの代表的な花としては、カタクリをはじめ、アズマイチゲやニリンソウなどが咲きます。

奥多摩は、雲取山から多摩川までおよそ1800mもの標高差があり、平地で3月に咲く花を4～5月に見ることができます。

今回、募集する100種類の花は、春の花とは限りません。四季折々の花を選んでください。

野の花、山の花、谷川や岩場に咲く花、草から木に至るまで100種類では物足りないかもしれません。皆様に選んでいただき、「奥多摩の花 百選」と題して多くの方々に親しんでいただくことがその趣旨です。

それには、いくつかの条件があります。当然、奥多摩に自生していることが条件ですが、植栽種や本来、山地にはないはずの帰化植物、あるいは、鹿による食害や人的被害でほとんど見ることができなくなった植物を除外します。

なお、自生する場所は、レッドデータブック掲載の希少種や地域限定種に限り公表することはできませんのでご理解ください。（岡崎 学）

### 《応募要領》

原則として1人10種以内です。ぜひ、その花への思い出や好きな理由等を添えてください。

郵送、FAX、メール等で奥多摩観光協会宛にお送りください。宛先は、最終ページにあります。

第1期募集期間：6月30日まで

E-mail：info1@okutama.gr.jp

# ～新企画紹介～

## 1 奥多摩三山シリーズ

奥多摩町と檜原村・あきる野市との境界にある三頭山・御前山・大岳山の三山を、奥多摩三山と称し、多くの人が登山を楽しんでいます。

この三山を、シリーズとして取り上げました。

### \* 御前山 (実施日: 4月22日)

奥多摩湖畔から小河内峠に登り、栃寄沢から境橋に降りるコースを歩きます。

奥多摩湖畔の「いこいの道」に入り、清八新道に取り付きます。防火帯の急坂を直登する道と、それをジグザグと登る道が交錯しています。やがて、石尾根の眺めの良い檜原村に通じる小河内峠です。危険な「馬の背」を迂回路で通って、ソーヤノマルデッコの登り口辺りに着くと、カタクリの花が現れ出します。急坂を登り詰めた岩上からの富士山の姿は見事です。

御前山山頂で、たっぴりと展望を楽しみ、ゆっくりと昼食をとって帰路につきます。大岳山への道と分かれた先に避難小屋があります。ほどなく湧水広場の入口に着き、カラマツ広場、トチノキ広場と続く体験の森が始まります。

トチノキ広場で休憩後、栃寄大滝(コハンギョウの滝)から栃寄沢に降り、心地よい水音に疲労を癒されながらの歩きで終着地の境橋に到着です。

### \* 大岳山 (実施日: 5月17日)

ケーブルカーの御岳山駅に入り、鋸尾根を愛宕神社に降りるコースを歩きます。

芥場峠先の運搬車終着地までは、平坦地が続くゆるやかな登り道です。ここで広い道は終わり登山道が始まります。危険箇所にはクサリ、鉄バシゴが設置されています。大岳神社から、急坂で露岩の多い道を慎重に登り山頂に立つと、目の前に御前山と雄大な富士山が迎えてくれます。

下りの鋸尾根は長丁場です。山頂下の巻道まで注意して降りると、平坦な心地よい道がしばらく続きます。短い急坂を登った鋸山は、展望はありません。下って少したつと、露岩が多くなり、古い木段が残っている道になります。この歩きにくい道も、カラス天狗像(天聖神社奥ノ院)を通過すると、落ち着いた植林帯の中の道になってきます。コアシサイが群生しています。電波塔を過ぎると、間もなく愛宕神社です。200段近い石段をユックリ降りて、奥多摩駅に向います。

### \* 三頭山 (実施日: 6月9日)

檜原都民の森から三頭大滝経由で登り、山のふるさと村へ降りるコースを歩きます。

森林館から、森林セラピーロードに指定されている「大滝の路」に入り、クッションの良い木材チップの感触を味わいながらの快適歩きで、三頭大滝との出会いです。落差33mの滝を後に、不規則な石の多い登山道に入っていきます。時折渡る沢での水触れを楽しみながら、ムシカリ峠に出ると、避難小屋があります。峠から、いよいよ最後の登りで、富士山が迎えてくれる広々とした三頭山山頂です。

下り始めてすぐの東峰を過ぎると、ブナの樹を縫っての快適な道と出会います。見晴し小屋を経て、ブナ坂を鞘口峠まで歩き、ここから左側の木段を一気に下ります。崩壊して一時通行困難になった箇所には迂回路が作られ、今では登山に支障はありません。周遊道路を越えて、山のふるさと村に入り、ピジターセンターの展示物見学で山行終了です。

(高野義男)

## 2 笹ノ岩山から蕎麦粒山 (実施日: 5月25日)

鳥屋戸尾根は、埼玉県境の蕎麦粒山(1472.9m)から南下し末端は日原川と川苔谷の合流点までの長い尾根です。登山口は、バス停川乗橋から川苔谷林道を約150m進むと左へ大きく曲ります。この左手に私製の指道標があり「笹ノ岩山」と記されています。いきなりの急登が約30分、スギの植林帯を登りきると独標(509m)の北側の鞍部に着きます。

ここから稜線上の踏み跡を忠実に登ります。1000m付近には滑落死亡事故もあった短い砂礫状斜面の悪場があり慎重に通過して欲しい。ほどなく笹ノ岩山(1254.8m)のピークが見えてきます。道は山頂のすぐ東側を巻いているので見過ごさないように注意し、左手の小笹の中の道に入ります。山頂の眺望は乏しく私製の山頂標識があります。

この先、快適にいくつかのピークを上り下りした後、[東京都水道水源林]の標柱が立つ水源林巡視道(縦走路)に出会います。ここまで来ると指道標もあり迷うことも無く、巡視道を横切って急な坂道を蕎麦粒山へと一気に登ります。狭いながらも露岩のある雰囲気の良い山頂です。

稜線沿いでは、シロヤシオの花が楽しめます。

下山コースは、一杯水方面へ向い東日原へ下ります。

(古谷省二)

## ～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その15 ～

### 「鷹ノ巣山、六ツ石山のダブル遭難」

昨年の奥多摩は、4月中旬まで山岳遭難は1件もなかった。山岳地帯における変死や捜索などはあったのだが、山岳事故の発生はなかったのだ。この分だと発生も最小限に抑えられそうだな、などと高を括っていたのだが、行楽シーズンに入るとバタバタと事故が発生し、終わってみれば山岳遭難発生件数は30件、死者は3名と平年並みの結果となってしまった。

12月13日(日)朝、私が出勤すると救助服の隊員数名が山岳救助隊本部の奥多摩交番に集まっていた。昨夜10時40分ころ、都内N区に住む女性から奥多摩交番に電話があり、「夫のA(61歳)が今朝早く『奥多摩の山に行ってくる、今日は急な所を登るから遅くなるかも知れない』と言って出かけたが、まだ何の連絡もない、遭難したのではないかと救助要請があったという。

高田副隊長が詳しい状況を聞くと、Aさんは20年ほどの登山経験があり、奥多摩の山には日帰りでよく出かけたという。今回の行き先は言わなかったが、以前から鷹ノ巣山の話をよくしていたし、まだ登っていないので鷹ノ巣山ではないかとのことであった。そこで、高田副隊長は今朝から捜索に入るため、救助隊員の招集をかけたものであった。

私は「Aさんの登山経歴は長いようだし、鷹ノ巣山に登った確証はない。ピバークしていれば下山できる時間の9時半ごろまで待ってみてはどうですか」と高田副隊長に進言し、自分も救助服に着替えた。

しかし午前9時を回っても自宅への連絡はなかった。昨日は天気良かったので大勢の登山者が入山している。登山道でアクシデントが発生したのであれば登山者から通報があるはずだ。どこか仕事道にでも迷い込んだか、転落でもして動けないでいるのかもしれない。

奥多摩消防署に捜索で山に入る事を連絡し、午前9時30分から、Aさんが登ったと思われる鷹ノ巣山を中心に捜索を開始することにした。2名ずつ3個班に分かれ、1班は高田副隊長と清原小隊長で、峰谷～ノボリ尾根～榎ノ木山～倉戸山～女の湯。2班は橋本小隊長と佐藤隊員で、日原～稲村岩尾根～鷹ノ巣山～六ツ石山～トオノクボ～ハンノキ尾根～境。3班は私と襦袢(ねしめ)隊員で、奥～浅間尾根～鷹ノ巣山避難小屋～水根山

～入奥沢～奥。のコースにそれぞれ入山した。

私は襦袢隊員と最もポピュラーな浅間尾根を辿った。浅間神社を過ぎ、下山してくる数人の登山者に会い、Aさんの事を尋ねたが、誰からもAさんの情報は得ることができなかった。

1時間30分ほどで鷹ノ巣山避難小屋に登り上げた。上空には警視庁航空隊のヘリ「おおとり」が飛来し、空からの捜索も行っていた。避難小屋で早めの昼食をすませ、鷹ノ巣山頂には登らず、巻き道を水根山分岐まで行き、榎ノ木山方向に下る。15分ほど下ると、今は使われていない仕事道が、入奥沢源頭部を回りこみ奥集落までついている。以前この道に迷って入り込んだ登山者が、崩壊した道から入奥沢に転落し、死亡するという事故もあった。

入奥沢の右岸に渡ると仕事道の崩壊が激しくなり慎重に下って行った。午後1時20分、無線で「山中に人が倒れている」との110番指令を傍受した。場所は石尾根から三ノ木戸方向に下る登山道から、山葵田の仕事道を小中沢方向に10分ほど入った所だという。ハンノキ尾根から仕事道に迷い込んだ登山者が、仕事道下に転落している男性を発見。最も近い民家まで下山し110番通報したものであった。

転落者はAさんかもしれない。各班はそれぞれのコースを下って現場に急いだ。とりあえず今日、下に残留している山内小隊長以下3名が確認に登ることになった。三ノ木戸林道の終点から入れば、現場までは徒歩20分ほどで行けるという。

そして現場に到着した山内小隊長から110番の続報が入った。「転落している男性は、登山道から約150メートル転落し、すでに死亡しており、昨日転落したものであると思われる。また持ち物などから捜索しているAさんである可能性が高い」という。

午後3時すぎ、私と襦袢隊員は奥集落まで下山した。無線で呼んでおいた交番の車に乗し、三ノ木戸林道終点に急いだ。終点には沢山の車が駐車していた。そこにいた前田隊員に状況を聞くと、1班2班ともすでに到着、刑事課員も現場に到着し実況見分をしているという。

私達も徒歩で現場に急いだ。登山道から仕事道に入ればしばらく行くと、作業をしている隊員の姿が見えた。実況見分を終え搬送作業に移っていた。急斜面の崖に作られた狭い仕事道で、担架搬送が困難なため、遭難者を背負子に付け佐藤隊員

が背負い、前後からザイルで確保しながら搬送している。足を踏み外せば二重遭難になりかねない。私は後ろのザイル確保を交代した。何ピッチかザイルを掛け替えて登山道に出、さらに10分ほど下って林道終点に着いた。

残念な結果になってしまった。Aさんは登山道から急な植林帯を転落し、その下を通っている仕事道をも通り越し、崖の下まで約150メートルも落ちている。即死であったろう。ザックは途中で引っ掛かっていたし、遺体のそばには携帯用酸素ボンベが使用された状態で落ちていたから、呼吸が苦しくなって使用している最中に、足でももつれて転落したものだろうか。

今は小中沢の山葵田に行くには、資材運搬用のモノレールが架けてあるから、あの仕事道は使用されていない。たまたまあの道に迷って入り込んだ登山者がいたから、運よく早期発見につながった。遺体は刑事課員に引き継ぎ、山岳救助隊員は午後4時30分、車で山を下った。

午後4時40分、氷川の町に入る直前、通信指令本部から「山での道迷い救助要請」の指令が入った。「六ツ石山から榎ノ木尾根を下山中の男性登山者が道に迷った」というものである。

とりあえず一旦交番に戻り、救助要請者の携帯電話を呼び出し状況を聞いた。遭難者はK県在住の男性、Kさん(61歳)だという。奥多摩湖から六ツ石山に登り、石尾根を鷹ノ巣山方向に行き、水根山分岐から榎ノ木尾根に入り、途中尾根の右側に迷い込み、沢をひとつ越えて尾根を登り上げたが完全に道に迷い身動き取れなくなってしまうと言っている。

遭難者の言動をもとに推理すると、ノボリ尾根上部か榎ノ木山周辺で迷っている可能性が濃厚だった。「どうする？」みんなクタクタだった。どこも負傷などしていないというが、救助要請があった以上また登らなければなるまい。

再び山岳救助車に乗り込み、パトカー2台を帯同し、先ほど降りてきた奥集落に向った。3台とも赤色灯を点けて奥集落上の林道の終点までゆっくりと移動し、Kさんにケータイを入れた。浅間尾根登山口周辺で、チラリと赤色灯が見えるという。

今度は入奥沢を挟んでノボリ尾根の対岸、赤指尾根側にある、峰集落に移動した。峰集落は標高900メートル、東京都で一番標高の高いところにある集落である。赤色灯を点け、今度はサイレンも鳴らした。ケータイをいれると「赤灯はよく見えるし、サイレンも小さく聞こえる」という。

パトカーから集光ライトを出し、方向を変えながらケータイで話し、「そこが一番明るい」といった延長線上は、やはりノボリ尾根の上部であった。

もう真っ暗闇でみぞれも降り出した。私はKさんにケータイを入れた「おおよその位置は分かったので、これから登ります。雪が降り出したので、焚き火をしながら待っていて下さい」と言う。「木が濡れていて焚き火はできません」と言う。「今日接触できなければピバークとなりますよ。暖を取れなければ凍死しますよ。何とか火を起こして下さい。大きな木を組んで焚き付けを置き、火を点けたら細かい小枝から徐々に大きな木に燃え移らせていけば焚き火はできます。頑張ってみて下さい」と言って電話を切り、ノボリ尾根末端に移動した。

ノボリ尾根は、以前登山道として使われていたらしいが、今は辿る人もいない急峻な尾根だ。

午後7時に入山を開始する。取り付から胸突き八丁の登りが続く。昼間もこの尾根を登った高田副隊長と清原小隊長は、うんざりだろう。

1時間ほど登り、大声でKさんの名前を呼び、ケータイを掛けるが聞こえないという。違う尾根なのかと焦りも出てくる。急登は続く。そういえば誰も夕食は持ってきていない。シャリパテも出てきた。夕方からのみぞれが、薄っすらと尾根に積もりだした。

2時間ほど登ると僅かに傾斜が緩む。その時、フッと風に乗って焚き火の臭いがした。みんな気付いたようで「おっ、近いぞ」「おーい。おーい」と叫びながら先を急ぐ。すると前方から「おーい」と応答があった。私のヘッドランプの光の中に人影を捉えた。「Kさんか？」と声を掛けると「そうです。申し訳ありません」と煙の中から声がした。何とか焚き火はできたようだった。

午後9時05分、遭難者と接触した。Kさんはどこもケガなどはしていないという。少し休んで、焚き火に水を掛け丁寧に消した。Kさんを登山道のないこのノボリ尾根を降るす訳にはいかない。寒くならないうちに登りにかかった。まだ先は遠かった。

榎ノ木尾根に登り上げ、倉戸山まで行き、熱海までの急坂を下った。熱海の駐車場に着いたのは日にちが替わった午前0時30分だった。

それにしてもダブル遭難救助はキツイ。この日は61歳が厄日であった。ひとりには亡くなり、ひとりは無事救助され明暗を分けた。

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

# 奥多摩昔語り

## 奥多摩の地名(17)

境(さかい)は、境目にあたる地域という意味で付けられたといひます。

〔西多摩郡村誌〕境村の条に、「里人ノ説ニ、中世甲斐ノ武田氏勢強大ナリシ頃、此辺マデ蚕食シ、該村ソノ領スルトコロノ境界タリシヨリ村名ニ負シナリト云リ。」とあり、小河内一帯は、一時期武田氏の勢力下に置かれたことがあり、その境目にあたる地域故に、境と呼ぶようになったといひます。

また、中世の頃、畑中と日向和田(現青梅市)以西、多摩川上流の小河内郷境までの地域を氷川郷といひましたが、この小河内郷と氷川郷の境が、地名になったといひられています。

また、小河内地内等の仏教の宗旨は、秋川筋から入ってきた鎌倉建長寺派の臨濟禅ですが、境以東の宗旨は、青梅市天寧寺派と海禅寺派の曹洞禅に属し、この宗旨の境目が、地名となったといひるものです。

境は、東は氷川、北は日原、西は原と留浦、南を

檜原村に囲まれ、中央を西から東へ多摩川が谷をつくり、南北は険しい山岳地帯です。

奥多摩地域では、大昔から盛んに焼畑農耕が行われてきました。大ざす、小ざす、あざす、高指、日向ざす、さす沢、すそーり等、サスとかソーリの付く小字は、焼畑が行われてきた地域の名残です。

〔武蔵名勝図会〕境村の条に、火田とあり、冬から正月にかけて山中の草木を伐り倒して置き、3月末頃になってから火をつけて焼き尽くし、熊手でかきならした跡へ豆、蕎麦、粟などをさくなしに種をまき散らして耕作する方法で、遠い場所にある焼畑は、小屋掛けをして寝泊りしながら耕したのです。江戸時代も作物の獣害対策として、亥垣を築いたり、鉄砲で驚かしたり、見張りを立てたりして防いだのですが、現在と同じで、猿、鹿、猪の神出鬼没な行動には、手を焼いたのでした。

【資料】奥多摩町誌、広報おくたま

(岡部義重)

## 奥多摩歳時記

### 山菜のお話

山は今、芽吹き(のこ)の時期です。そして、植物の芽吹きは、私たち人間の気持ちを癒してくれると同時に、胃袋にも満足感を与えてくれます。そう、これからは山菜の時期でもあるのです。

ひと口に「山菜」と言いますが、食用にする対象(部位)により、ほぼ次のように分けられます。

#### \* 全草(根を除く)を食べる

山菜の中で代表的なものが、春先に地上に顔を出す草本(草)でしょう。芽生えからしばらくの間は、刃物を使わずに手折ることができますので、この可否を目安として採ると良いでしょう。

これらには、ウワバミソウ(ミズ)、オオバギボウシ(ウルイ)、セリ、ニリンソウ、モミジガサ(シドケ)、ツリガネニンジン(トトキ)、オケラ、ミツバ、ヤブレガサ、ウドなどがあります。このうち、ウドは、まだ葉が開く前の根際の莖(こ)の他、ある程度育った莖や、初夏まで採取可能な新芽も対象となります。また、雪国と違い、この辺りでは採ると叱られそうですが、カタクリも美味しい山菜です。

この他、ワラビ、ゼンマイ、コゴミ(クサソテツ)、などのように新芽が巻いているうちが採取

時期であるシダ植物があります。

#### \* 若芽を食べる

これらの多くは木本(樹木)で、タラノキ、コシアブラ、ウコギ、タカノツメ、ハリギリ、サンショウなどで、ウコギ科の樹木が多く含まれます。この中で、コシアブラは雪国の習慣が伝わった後に食べるようになり、ポーダラと呼ばれていたハリギリ、そしてタカノツメは、奥多摩ではあまり食用にしていなかったものです。

これらの山菜に共通しているのは、新芽が束生することです。これは、採取に適していると言えます。

若芽と言えるかどうか微妙ですが、つる植物であるアケビの仲間のように、伸びる前のつるを対象とする山菜もあります。

これら地上部を対象とする以外に、ノビルやヤマユリのように根(鱗莖)を食べるものもありますが、そう多くはありません。

なお、有毒な植物にそっくりな山菜もありますので、採取には充分に気をつけてください。

山菜採りは、翌年以降の楽しみのためにも、節度ある採取とマナーを守って、根絶やしにしない配慮が欲しいものです。(堀越弘司)



## ガイドだより ~ベストを尽くせば役に立つ~

救急救命に挑戦していた現場に遭遇したので、その顛末を記してみたい。

事故の発生した場所は三頭山。登山中のパーティ(5人)の1人が突然持病の心臓発作を起こして倒れた。他の4人は迅速に救助法の手順に従って対処中である。心臓マッサージを開始しながら、他の1人に責任をもって最寄りの消防署へ連絡してくださいと頼んでいた。当然、携帯電話で事の顛末を伝えた。又、献身的にマッサージを行っているが、疲労気味なので交替して徹底的に続行していたが、倒れた本人はまだ意識もなく、呼吸すらできない状態である。救命する側は心配が絶えないし、焦燥感がつのってきた。しかし、冷静さを保って懸命に努力していた。

消防本部から確認の電話が入ってきた。「本当に緊急事態なのですか？」など、本人の様子など詳しく問いただしてきた。「本当です。」と真剣に回答していた。それで確認されて消防署からヘリコプターを要請した結果、約30分後に赤色のヘリが現場の上空に飛来した。当然のことだが、手鏡を使用して現場をヘリに伝えたが、樹木が邪魔となって不具合である。パーティの1人が急ぎ足で頂上近くまで登って空地を探した。そこにヘリが進行して、現場確認のためレスキュー隊員が降下した。

片や心臓マッサージを続行していた方では、かなりの時間が経っていたが、ようやく倒れた本人からかすかなうめき声が発せられた。だが意識は完全に回復していない状態である。

てきばきとレスキュー隊員は、倒れた本人をヘリに收容し、最寄りの医療センターへ搬送した。後日聞いた話では倒れた本人の快復は順調に進み、意識を取り戻したとの事であった。以上、概略である。

この体験から、緊急時に対応するために大切なことは、

- ① 絶対に慌てないこと。
- ② 冷静に判断して、正しい指示をだすこと。
- ③ 最大の努力を払って「助けるぞ」という意気込みを持つこと。
- ④ 普段から救急救命法を確認、実施訓練をすること。

ということをつくづく必要だと感じた次第である。

(佐藤健介)

## イベント案内

奥多摩町と観光協会では、春から初夏に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

22年度のイベントカレンダーが出来ておりますので、ご入用の方は、返信用封書に80円切手を貼り、お申込みください。

- ① 5月17日(月) 奥多摩三山シリーズ  
大岳山に登ろう  
応募締切日 4月30日(登山健脚)
- ② 5月19日(水) 新緑の奥多摩湖右岸15kmを歩く(いこいの路)  
応募締切日 4月30日(ハイキング)
- ③ 5月25日(火) 笹ノ岩山からソバツブ山(シロヤシオ)  
応募締切日 5月10日(登山健脚)
- ④ 6月1日(火) じっくり・ゆっくり植物観察(場所はお楽しみに)  
応募締切日 5月15日(ハイキング)
- ⑤ 6月3日(木) 石尾根 鷹ノ巣山登山  
応募締切日 5月15日(登山健脚)
- ⑥ 6月9日(水) 奥多摩三山シリーズ  
三頭山から山のふるさと村へ  
応募締切日 5月25日(登山)
- ⑦ 6月11日(金) 妙琴ゼミを訪ねる倉戸山  
応募締切日 5月25日(登山)
- ⑧ 6月18日(金) 大塚山のコアジサイを訪ねる丹三郎コース  
応募締切日 6月6日(登山)

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成22年7月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会